

人類史の中で、疫病に見舞われて、悲劇を体験したことがしばしばあった。聖書には、出エジプト記9章に、神はモーセを通して疫病を送り、エジプトの家畜が全て死んだと記している。列王記下19章には、アッシリアの王センナケリブが大軍を率いてエルサレムを包囲した。ヒゼキヤ王を始め、エルサレムの住民は震えおののく。しかし預言者イザヤは神によってエルサレムは守られると告げる。その夜、主の使いがアッシリアの18万5千人の大軍を打ち殺し、センナケリブは退却した。大軍の数は過剰表現であろうが、この戦いは史実である。軍隊の敗退は疫病の蔓延によるものと言われている。大軍の行進は過労と不潔で、しばしば疫病に襲われ、滅亡している。ローマ軍にも見られたことである。

近年では、新型インフルエンザ、サーズ、エイズ、エボラ出血熱などが流行した。これらの感染症は細菌、ウイルス、寄生虫など、原因は異なるが、人類に大きな困難と悲劇をもたらしてきた。ヨーロッパはペストが度々大流行し、恐怖に晒されたが、抗生物質によって抑えられている。現在は、新型コロナウイルスのパンデミックによって、世界は苦悩のただ中にある。この時、アルベール・カミュの『ペスト』が、ヨーロッパではベストセラーになり、日本でも多く読まれている。実存主義が流行っていた私の学生時代、実存主義作家と言われたカミュの『ペスト』『異邦人』『シシフォスの神話』などを読んだ。今回、もう一度読み返してみた。フランスの植民地であった北アフリカのアルジェリアの小さな町オラン市で、鼠の死骸が次々と発見され、人々にも鼠のペストが感染し、死者が続出するようになる。街の門は閉鎖され、人々は閉じ込められ、ペストの恐怖に街中がごった返す。今回のコロナで、地続きのヨーロッパでは、街と国境が封鎖されたペストの時と同じ体験となり、それが『ペスト』を再読させたのである。報告者で主人公の医者ベルナール・リウーを中心に周りの人々が、侵入してきたペストという不条理に対し、それぞれの人が自分の実存をかけて、関わった姿を描いている。もちろん、恐怖に敗北した人もいれば、空しく死を迎えた人もいる。その混乱は、現在のコロナ襲来と同じである。ペストが終息した後、「そのとき医師リウーは、ここで終わりを告げるこの物語を書きつづろうと決心したのであった — 黙して語らぬ人々の仲間にはいらぬために、これらペストに襲われた人々に有利な証言を行うために、彼らに対して行われた非道と暴虐の、せめて思い出だけでも残しておくために、そして、天災のさなかで教えられること、すなわち人間のなかに軽蔑すべきものよりも賛美すべきもののほうが多くあるということ、ただそうであるだけでいうために。」と、書いている。『ペスト』は歴史や社会問題を扱ったというより、暴虐に襲われた時の人間のあり方、それは、ヒューマニズムに満ちたものであったという人間実存を描いた小説と言えよう。最後に、ペスト菌は死ぬことも、消滅することもなく、人間に不幸と教訓をもたらすために、幸福な都市に人間を死なせるために差し向ける日が来ると書いて、終わっている。その通り、感染症は繰り返し、襲ってきている。

ポストコロナが論じられている。私は三つのことを思っている。① 貧富の格差が米国、ブラジルなどに如実に表れ、悲劇を増幅している。日本でも、非正規の人々が大きな負担を負わされている。格差社会をいかに超えられるか。② 東京に一極集中したような社会は感染症に弱いことが分かった。魅力ある地方都市を造り、分散した都市形成ができるか。③ 他国と強調し合うグローバルな関係は今後も続くだろうが、自給力をつけることは必須である。殊に、食料の自給率を上げることは最も大切なことではないか。